BAT Study and Conservation REPORT

コウモリ通信 Vol.5 No.1 1997.1

各地からの報告

モリアブラコウモリ図書室で休眠　横山　恵一

キクガシラコウモリの交尾栓について　津曲　直子・小嶋　篤史

コウモリ情報交換手段としてのネットワーク活用　橋本　肇

ヤエヤマオオコウモリ　盛口　満

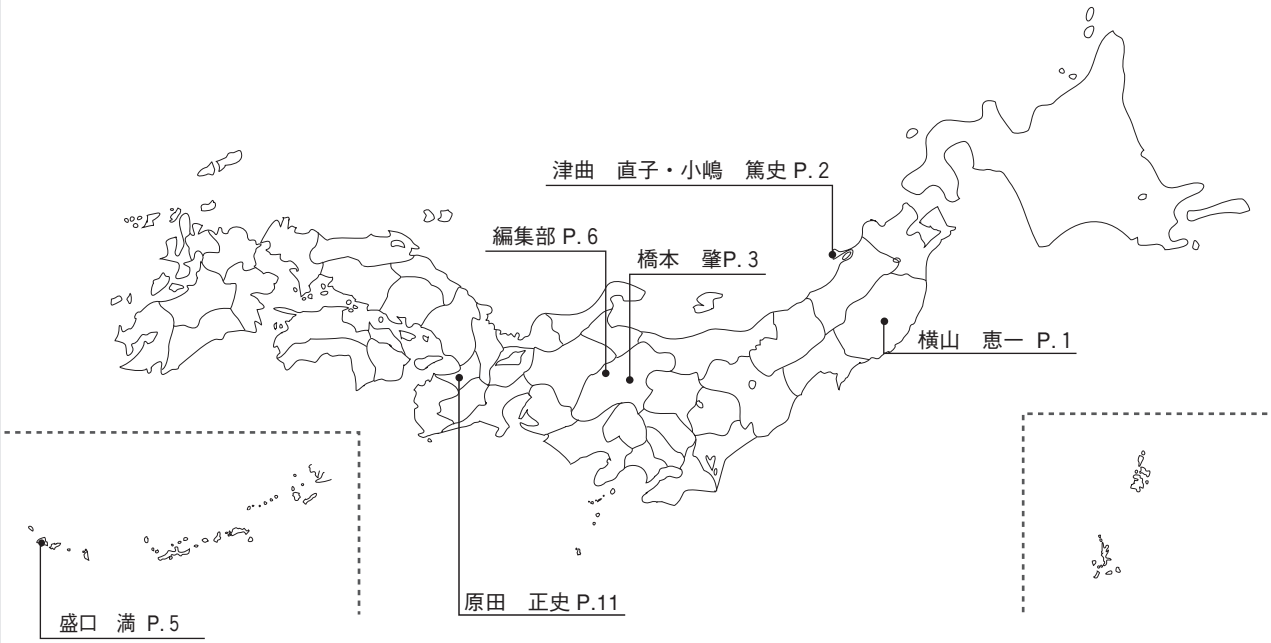
乗鞍高原コウモリフォーラム　編集部

日本で２番目のコウモリ小屋完成　編集部

1996年度コウモリの会総会報告

インフォメーション

もくじ



各地からの報告

モリアブラコウモリ(*Pipipstrellus endoi*)，図書室で休眠

横山　恵一

1996年10月15日、岩手県の早池峰・薬師岳山麓にある遠野市立大出小・中学校（標高約450m）の宮守典子先生から、「かわいいコウモリ発見」の電話を頂きました。なんでも、中学生の小野博則君が図書室の戸棚の中で休眠している小型の黒っぽいコウモリを見つけたのだそうです。大きなブナやミズナラの林が間近にせまっている同校のこと、そのコウモリ、きっとただ者じゃないぞ、と期待しながら車を飛ばしました。職員室で早速見せて頂くと、案の定、rare species!　モリアブラコウモリの

雄でした。体毛と翼膜がかなり黒っぽいなー、というのが、第一印象です。かわいそうに、右大腿部に傷があり、少し膿んでいるようでした。

このコウモリ（写真１）はお預かりして大事に飼っていたのですが、残念にも一週間ぐらいで死んでしまいました。ケージの中でクンクン言っている声はバットディテクターの目盛りで50kHzぐらい。しかし、もう一つうまく記録できず、これまた残念に思っています。

なお、今回のことに関し、endoiのご本家ともいうべき遠藤公男先生に伺ったところによると（私信）、森林性コウモリの代表のような本種でも、まれには人家の屋根の下や薪小屋に入り込むことがあるそうです。これまでに、岩手県下で３例ほどそういうことがあったとのこと。

冥福を祈りつつ、以下にこのモリアブラコウモリの主な測定結果を列記し、また本種の特徴の一つにあげられている犬歯の形状についてもご報告します。　前腕長32.0mm、尾長33.4mm、脛骨長11.6mm、第三中手骨長29.9mm、同第一指骨長12.4mm、同第二指骨長9.0mm、同第三指骨長7.8mm、第五中手骨長27.3mm、同第一指骨長7.5mm、同第二指骨長4.7mm、耳長10.5mm、頭骨全長13.4mm、頭骨基底長12.7mm、上顎歯列長（犬歯-臼歯）4.4mm、体重6.5g。

また、翼荷重=体重/翼面積と、翼の縦横比=翼開長^2/翼面積は、それぞれ0.10と6.03でした。一方、図１に示すように、犬歯における後尖の発達はいま一つ。でも、本種にみられる犬歯形状ヴァリエーション（Imaizumi,1959）の範ちゅうには納まるようです。

写真１　図書室で見つかったモリアブラコウモリ（飼育中に撮影）

図１　右上顎犬歯とその後尖（矢印）

引用文献

Imaizumi, Y .(1959) A new bat of the *Pipistrellus javanicus* group from Japan. Bull. Nat. Sci. Mus.,4(4),363-371.

（よこやま・けいいち　日本洞穴学研究所）

キクガシラコウモリの交尾栓について

津曲　直子・小嶋　篤史

1996年３月９日、秋田県男鹿半島にあるこうもり洞窟（男鹿市門前）に、向山満教諭（三戸高校）の引率でコウモリの観察に行ってきました。その際、とても興味深い知見を得る事ができましたので、ここに報告します。

この洞穴は日本海に面した海蝕洞であり、菅江真澄の紀行文にも見られる由緒正しい（？）こうもり洞窟です。洞穴には約4000頭のユビナガコウモリが集団冬眠していて、その様子とバンディング個体の確認が今回の目的でした。作業を終え、ユビナガコウモリの観察を十分に堪能し、横穴で冬眠する約200頭のキクガシラコウモリの観察を行っている時、津曲が、米粒を大きくしたような半透明黄白色グミ状物質を幾つか見つけました。辺りをよく見ると、そこかしこに新しい物から、黄色く縮み固くなり、かびの生えた古い物まで十数個見つけることができました。

育種繁殖学を専攻した津曲はマウスのプラグ（膣栓or交尾栓：射精された精液が膣内で固まった物で、精液の逆流を防ぐと考えられている）に似ていることに気付いた。場所、時期、大きさからキクガシラクモリの交尾栓ではないかと思われました。

コウモリの交尾栓に関する情報が、向山先生に見せて頂いた子ども向けの洋書の写真しかなく、詳しくは分からないのですが、間違いなくキクガシラコウモリの交尾栓だと思われます。発見された交尾栓は、秋の繁殖シーズンに作られ、冬眠から目覚めるこの時期、活動の活発化により脱落したのではないかと考えています。

今回このような発見ができたのは１）この洞穴が繁殖洞穴であったこと、２）更に冬眠洞穴でもあったこと、３）地表面が平坦で見易かったこと、４）プラグを見慣れた人（！？）がいたこと等の好条件に恵まれたためでもありました。皆さんもこのような好条件にめぐり合えたら、地表を探して見ると良いかと思います。

キクガシラコウモリの交尾栓

最後に、いつも楽しい観察に連れていってくださる向山先生にこの場をお借りして謝意を申し上げたいと思います。

（つまがり・なおこ／北里大学OG　こじま・あつし／北里大学学生）

コウモリ情報交換手段としてのネットワーク活用

橋本　肇

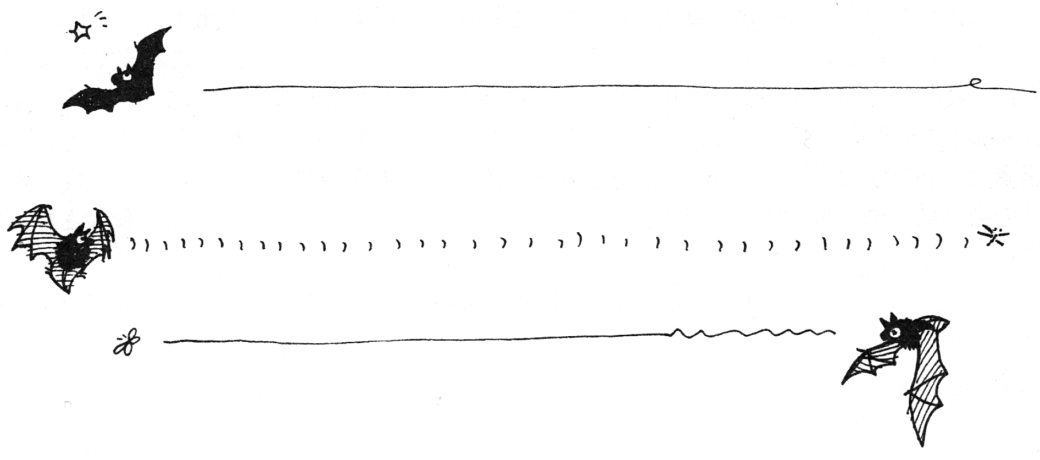
【電話でつながるコンピュータ】

近年、ハイテクに縁遠いと思われていたナチュラリストの間でも、情報伝達手段として E-mail などのコンピュータネットワークが活用されるようになってきました。しかし電子ネットワークの世界も１対１の E-mail から１対多数の Mailing List 、パソコン通信の電子会議やインターネットのホームページと方式・構造ともに幅広く複雑化してきています。これから家のパソコンを電話回線に繋げようと思う方には、一体どこでコウモリの話題ができるのか分かりづらいのではないかと思います。そこで、コウモリの話題が多い例として「ワイルドライフ」を紹介します。

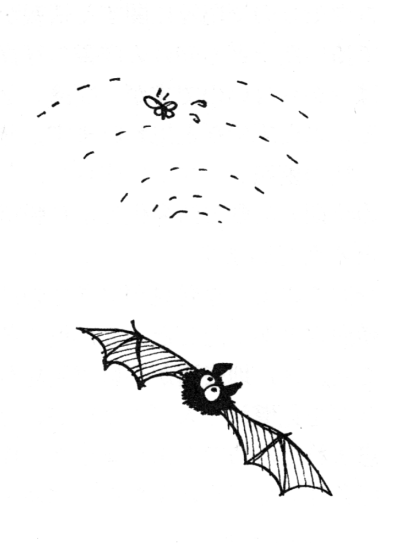
【野生動物の電子会議室】

パソコン通信の Nifty-serve にあるネイチャー＆バードフォーラム（FBIRD）の中には、野生動物に関する話題を誰でも読み書きできるオープンな意見交換の場として、「ワイルドライフ」という電子会議室が設置されています。

ここへ1996年１年間に寄せられた話題は、１回の書き込みを１発言として数え、総計約2,100発言あ


イラスト：藤原直子

りました。小は土壌の線虫類から大は海のクジラまで「鳥以外の動物」と、テーマは非常に多岐に渡っています（鳥については単独で電子会議室が設置されている）。コンピュータを使っている方ならばテキストファイル化したデータというのが扱いやすさに優れていることをご承知と思いますが、これらの書き込みはすべて電子的な形で保存されているわけです。すなわち、発言を行った時点でデータベース化されていると考えることができます。そこで、この電子会議室の議事進行を担当する議長の方がキーワード検索を行ったところ、次のような結果が出ました。許可を得て引用します。



【話題提供はコウモリがダントツ】

トンボ71件（トンボという言葉が入っている発言数、以下同じ）
キツネ89件
シカ94件（カモシカを含む。ア'シカ'などの検索結果は除く）
タヌキ118件
ネズミ121件（ネズミイルカを除く）
クジラ175件（イルカで検索すると171件、鯨で133件）
コウモリ340件

年間平均して1日1発言に近い割合でコウモリに関する書き込みが行われているというのは、96-97年冬期にオオコウモリの話題が出始めましたが、これまで小型コウモリについてのみだったことから、冬眠期に話題が少なくなることを差し引くと非常に勢いがあると言えます。これについて、同議長氏は「わりと身近にいて、不明の部分が多い、いろんな興味深い特徴を持つ動物なんでしょう。ナゾコエコウモリの話題は相当に盛り上がりました。もっと世間の人たちにもコウモリのこと知ってもらいたいですね。」とコメントしています。

【画像や音も通信を介して入手】

文章による情報交換は電子会議が手軽ですが、ネットワークを媒体にして他の情報を伝えることもできます。「ワイルドライフ」がある「ネイチャー＆バードフォーラム」には公開を目的にコンピュータで再生するファイル形式の画像などを登録するデータライブラリ機能があります。現在までに、コテングコウモリ、クビワコウモリ、アブラコウモリなど8種の写真とコキクガシラコウモリなどのバットディテクター変換音、また今年話題となった「なぞこえ」のソナグラム解析画像、乗鞍のコウモリ小屋の写真が登録されており、いつでも引き出すことができます。また今夏、横浜でネットワーカー向けに開催された行事期間に限って、その会場で50枚以上のコウモリの写真を次々画面に再生していく試みも行いました。

【電子ネット利用のすすめ】

誰でも気軽に利用できる反面、読んでいる者も不特定であるという事情から、特に野生生物の情報については各自が発信する内容に責任を負うことを踏まえて編集チェックを厳重に自己管理して行かなければならない、新しいメディアとして独自に作法が発展しているといった、これまでにない性質はありますが、時間的空間的な制限を緩和する方向へは確実に効果があります。実はコウモリの会の中でも既にE-mailによる連絡ができる人が増えつつあります。もしも興味を持たれた方がいらっしゃいましたらご遠慮なくおたずね下さい。また、Nifty-serveに限らず各自がお持ちのネットワークIDを集めて、コウモリの会会員のID名簿を作ることを提案したいと思いますがいかがでしょうか。賛同される方はmailを下さい。

（はしもとはじめ・長野県美しヶ原自然保護センター　　）

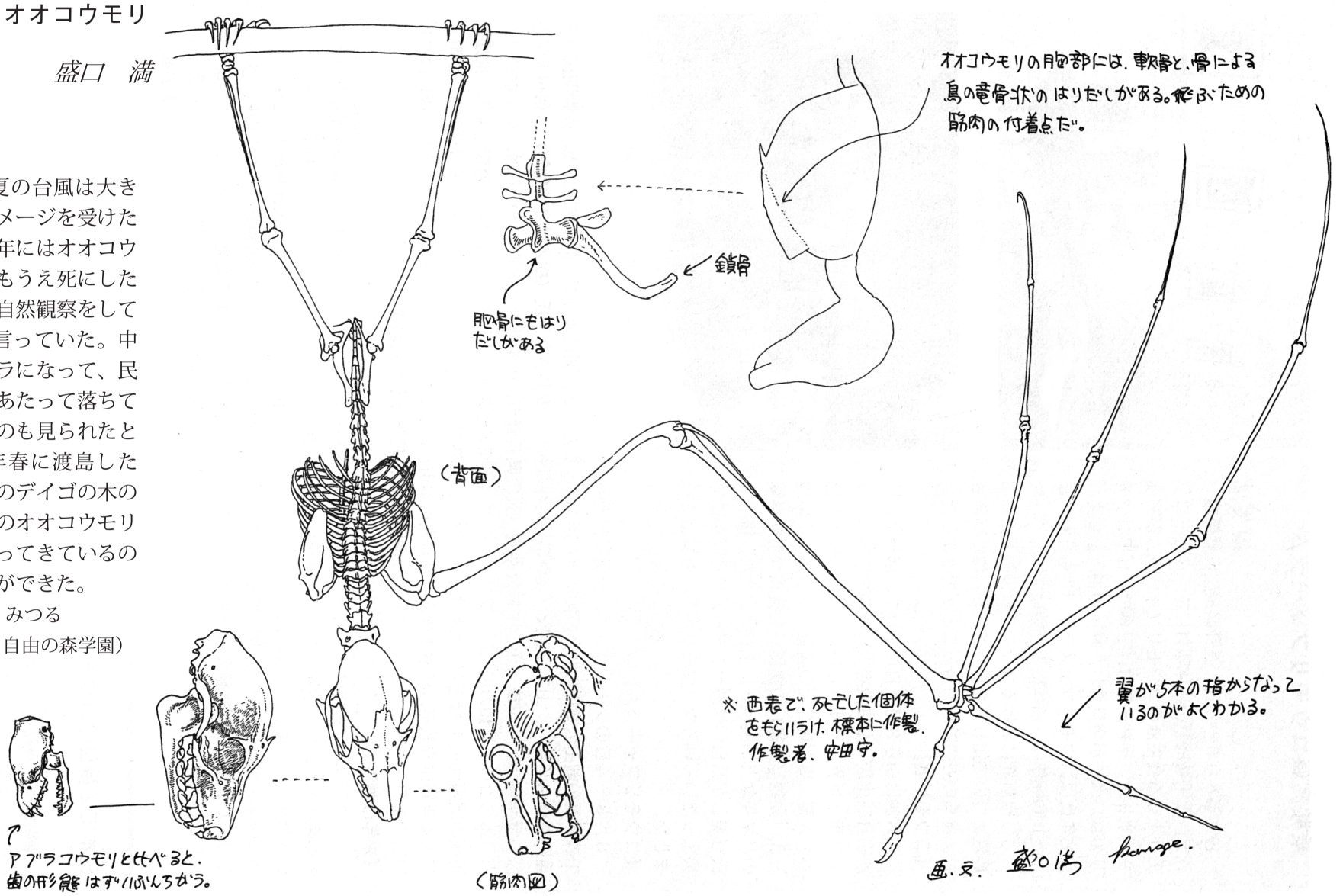
ヤエヤマオオコウモリ

盛口　満

西表産

1993年の夏の台風は大きく、林がダメージを受けたので、その年にはオオコウモリが何匹もうえ死にした…と地元で自然観察をしているH氏は言っていた。中にはフラフラになって、民宿のカベにあたって落ちてしまったものも見られたという。96年春に渡島した際は、大原のデイゴの木の花に、多数のオオコウモリが吸蜜にやってきているのを見ることができた。

（もりぐち・みつる
自由の森学園）



乗鞍高原コウモリフォーラム

編集部

1996年８月３－４日、長野県乗鞍自然保護センターと乗鞍高原国民休暇村にて、クビワコウモリを守る会主催のコウモリフォーラムが開催されました。乗鞍高原は、日本でクビワコウモリのコロニーが発見された唯一の場所として、1995年にはコウモリフェスティバルも行われました。1996年は、前年に引き続いて、広く一般の方に自然界におけるコウモリの役割とその重要性について知ってもらうことを目標に開催され、多くの方の参加を得ることができました。

コウモリ巣箱の展示会

コウモリ巣箱作成教室の模様

【コウモリ展】

７月29日から８月４日にかけて、展示室には前田喜四雄氏（奈良教育大）所蔵の日本のコウモリ類と世界のめずらしいコウモリの標本、絵本や図鑑、専門書などの書籍、グッズ、中川雄三氏（動物写真家）の撮影した貴重な生態写真のパネルなどが展示されました。また、橋本肇氏（美しが原自然保護センター）の呼びかけで集まったいろいろなコウモリ用巣箱も展示されました。

【コウモリフォーラム】

８月３－４日のフォーラムは、安曇村観光商工課係長の前田公寛氏の開会の挨拶から始まりました。２日間に渡って、前田喜四雄氏、佐野明氏（三重県農林水産部）、山本輝正氏（岐阜県八百津高校）、安井さち子氏（栃木県立博物館）、信州大学自然科学研究会、中川雄三氏、中村公義氏（長野県長野市）の講演と、人形劇＆紙芝居、シンポジウム（日本のコウモリ類の現状）、フリートーク（環境アセスメントにおけるコウモリ調査の実態、捕獲許可証の問題点etc.）などが行われました。また、野外ワークショップとして千々岩哲氏（滋賀県日野町）による巣箱作成教室、植木康徳氏（長野県松本市）によるバットディテクタ講習会、そして夜にはクビワコウモリ・コキクガシラコウモリの観察会と、懇親会が行われました。

【来年は青森で】

シンポジウムの最後に、向山満氏（青森県三戸高校）より、「来年は天満林村の蝙蝠小屋が20周年を向かえるので、村が主催になって行事を行いたいと計画している。ぜひ協力と参加をお願いしたい」というお話しが出ました。日時は1997年８月９日（土）－10日（日）。主会場は天満林村中央公民館。パネルディスカッション、コウモリ展、コウモリグッズ販売、ヒナコウモリの観察会、などの他ヒナコウモリのバンディング体験会も計画されています。くわしい内容が決まり次第、会員の皆さんにもお知らせしたいと思っています。

日本で２番目のコウモリ小屋完成

編集部

乗鞍高原の乗鞍自然保護センターに隣接して、日本で２番目のコウモリの小屋が建設され、10月27日にはその完成式典が開催されました。

このコウモリ小屋は、乗鞍高原のクビワコウモリを1989年から調査し続けている山本輝正氏（岐阜県八百津高校）が会長となり結成された「クビワコウモリを守る会」の働きかけで実現したものです。地

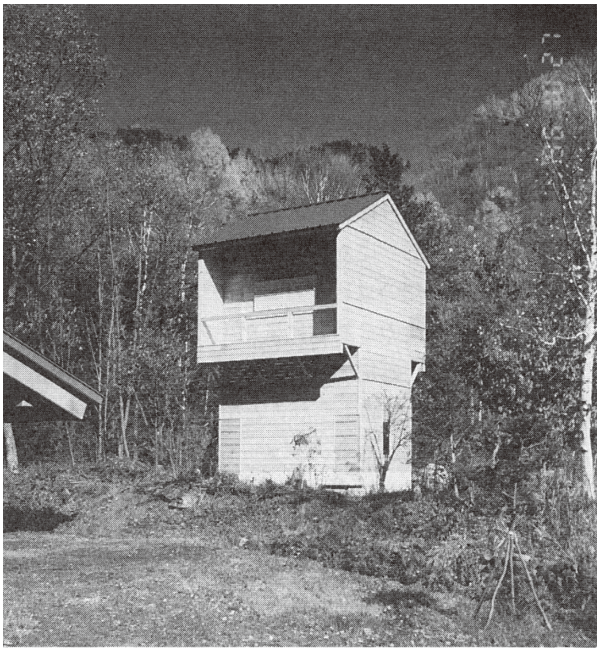
元の安曇村の協力を得、また資金的にはアムウェイネイチャーセンターの基金を獲得することができたのは、山本氏の長期にわたる地道な研究と、クビワコウモリの生息地を守ることへの熱意が多くの人々に共感を与えたことの結実と思われます。

完成式典では、山本会長の挨拶の後、来賓の安曇村観光商工課係長前田公寛氏、地元の環境庁中部地区国立公園・野生生物事務所科長徳丸久衛氏、アムウェイネイチャーセンター鈴江恵子氏の挨拶がありました。その後で、実際のコウモリ小屋が公開され、最後は立食パーティーで終了しました。

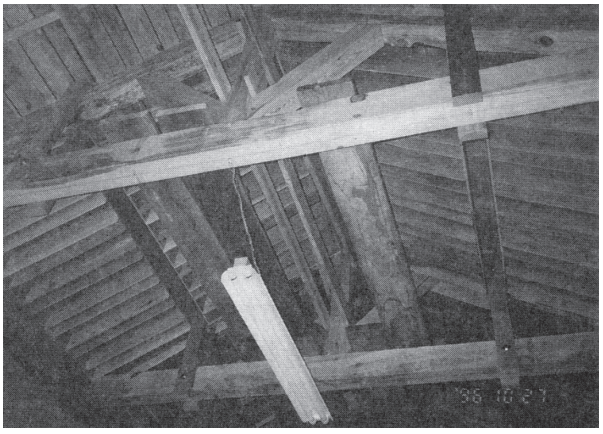
「クビワコウモリを守る会」は、「コウモリの会」とは別の独立した組織です。現在、会員を募集していますので、乗鞍高原のクビワコウモリに関心がある方は、ぜひ入会をお願いします。

●年会費：1,000円（郵便振替口座：00580-8-12256「クビワコウモリを守る会」）
●連絡先：〒390　長野県松本市蟻ヶ崎太平2255-7松本市アルプス公園小鳥と小動物の森
吉川登　方　「クビワコウモリを守る会」事務局
TEL／FAX 0263-36-5251
＊入会ご希望の方は、会費を振り込んだ上で、事務局へご連絡下さい。

なお、コウモリ小屋の詳しい内容については、「コウモリ通信」次号にてお知らせする予定です。



コウモリ小屋



コウモリ小屋内部。天井にはコウモリのためにとまり木も設けられている。

1996年度コウモリの会総会報告

編集部

1996年度のコウモリの会総会が、10月27日（日）に、長野県乗鞍自然保護センターにて開かれました。以下、総会の内容を報告します。

1　会計報告（1995年12月1日〜1996年10月10日）

●歳入	前年度繰り越し金	175,203円
	会費およびカンパ等	47,000円
	歳入計	222,203円
●歳出	郵送料（切手、ハガキなど）	67,190円
	会報印刷代	34,505円
	会報作成費用（写真代など）	1,735円
	その他雑費	10,554円
	歳出計	113,984円
●繰り越し金		108,219円

NHK科学番組部　チーフプロデユーサー　川野芳水　殿

９月３０日に放送された「生きもの地球紀行～コウモリの知られざる素顔」の番組内容の一部に、コウモリに対して多大な影響をおよぼしたと思われる取材シーンがありました。日本で撮影された九州のユビナガコウモリの哺育集団を紹介した箇所です。

出産直後の、幼獣にまだ毛の生えていないこの頃は、コウモリが１年の内で最も神経質になる時期です。番組では、ライトに照らされ、子どもをかかえてパニックになっている様子が映っていました。このようなことをすると、早産をひきおこしたり、あわてて子を落としてしまったり、コウモリにかなりのダメージを与えてしまいます。コウモリは早産で子にしがみつく力がなかった場合やアクシデントなどで、子を落としてしまった場合、その後回収をすることはほとんどなく、子は死んでしまうのです。

また、むやみな出産哺育洞への入洞は、そのようなパニックを一時的におこすだけではなく、その洞窟の放棄＝出産哺育コロニーの崩壊や消滅を招くおそれがあります。人が入洞したことにより、コウモリがいっせいに逃げ出し、戻らなかった例は今までにいくつもあります。このようなことはコウモリの個体数を確実に減らすことになります。

私たちコウモリ研究者も、この時期に洞窟に入ることは極力控え、どうしても必要な時だけに限っています。また、どんな時期でも、休息中のコウモリを照らす場合は、懐中電燈の光を直接あてるのではなく、赤いセロファンをつけて赤色光にし、少しでも影響を少なくするよう努めています。

TVで紹介されることは、コウモリについて多くの人に知ってもらうためにもたいへんうれしいことなのですが、同時に「コウモリを見るときはこんな風にしてもいいんだ」というまちがった知識を広めてしまうことにもなります。このことは、取材がコウモリに直接与える影響とともに、十分に注意していただきたい事です。

今後、以下のことをお願いしたいと思います。

●コウモリに関する取材・撮影をされる場合は、適切な方法をとれるよう、下記へご連絡いただければと存じます。

●洞窟内での撮影がどうしても必要な場合は、時期をえらび、赤色光、赤外線カメラを使用するなど、コウモリに対する悪影響を最小限にとどめる対策をお願いいたします。

●視聴者の皆さんにまちがった知識を与えないよう、今後、このようなシーンを放映する場合は、撮影には細心の注意を払ったことをアピールし、「洞窟に侵入することはコウモリに対して非常な悪影響をおよぼすのでよくない」ということを、番組内にコメントとして入れて下さるようお願いします。

今回の件に関するご返答を、正式な文書の形でお送りくださるようお願いしたします。

なお、この件に関しましては、10月27日に行われたコウモリの会総会で議題として提案され、抗議文を送ることになりました。また、この事は番組放送直後からパソコン通信NIFTY－Serveのフォーラム・FBIRDにあるワイルドライフ会議室でも問題になりました。ご覧になっていただければと存じます。

1996年11月22日

コウモリの会会長　前田　喜四雄
連絡先：コウモリの会事務局　三笠　暁子

2　会則の確認と役員改選〈1996年役員の選任結果〉

会長　　前田喜四雄
事務局長　　三笠暁子　　編集委員長　水野昌彦
評議委員　　赤沢泰　中川雄三　橋本　肇　松村澄子　向山満　安井さち子　山本輝正

なお、会則の第３章、第９条は、「他の評議員５名の合計８名。」を「他の評議員７名の合計10名。」に変更されました。

3　NHKに対する抗議文

NHK放送の番組中に、撮影によってコウモリに対して悪影響を及ぼしたと思われる映像がありましたので、総会での話し合いの結果、別記の抗議文をNHKに対して送付することに決定し、配達証明を付けて郵送しました。この抗議文に対してNHKより12月４日付けで返答が戻りましたので、その要約を紹介します。

コウモリの会会長　前田喜四雄氏宛
日本放送協会番組制作局科学番組部チーフプロデューサー川野芳水氏より、

「ご指摘の映像は『ふるさと自然発見　洞窟の小さな天使たち（1994年７月放送）』で撮影した映像を再使用したものです。担当者によると、地元でコウモリを研究している方に同行いただいて洞窟に入り、短い時間だけ最小限の照明を使って撮影を行ったそうです。しかし、入洞及び撮影が出産直後のコウモリに影響を与えたとすれば貴重な自然や生きものたちを守っていくという番組の趣旨に反することになり、私どもにとっても残念です。今後の撮影及び番組制作に際しては、これまでにも増して専門家のご指導を仰ぎつつ慎重に行っていきたいと考えています。（以上、要約）」

4　バードバンダーの方に「コウモリがつかまったら」お願い文配布

提案：橋本肇氏

以下のような内容のものを、全国のバンダーに配布してはどうだろうか、という案が、橋本氏より出されました。

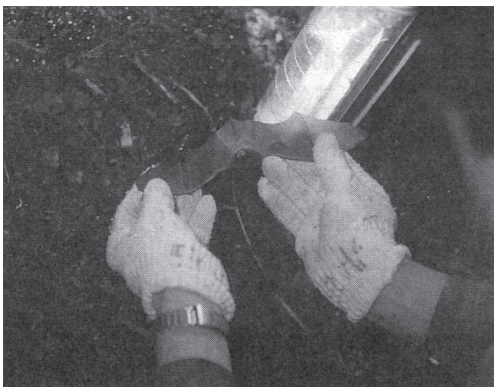
鳥類捕獲の霞網に、コウモリが混獲されることが全国的に報告されています。日本のコウモリ類の分布はわかっていないことが多く、捕獲情報は大変貴重です。また、コウモリ類の捕獲には国からの捕獲許可証を必要としますので、捕獲された場合は下記のように種の同定と性、繁殖状況などの参考になる部分を記録した後、すみやかに放獣してくださるようお願いいたします。

コウモリの会では、全国のコウモリ類の分布状況を調べていますので、捕獲の際は情報を提供して下さるよう、ご協力をお願いいたします。

●コウモリがかかった場合は、顔、翼、後肢腿間膜（要するに右足～尾～左足の間の飛膜）の形状を観察・記録されると同定の助けになります。
●可能であれば写真撮影をお願いします。ただし、コウモリがあまり暴れたり、人間の耳にきこえる声を出して鳴く場合は無理に扱わないで下さい。
●もしも個体標識用の金属翼帯が着いていたら、左右どちらに装着してあるかと番号を記録して下さい。
●コウモリはそのまま放逐して下さい。野外での活動時間は採餌中の場合が多いため、なるべく早い放獣がコウモリの生存に肝要です。

＊パンフレットにはコウモリ類の♂♀の見分け方、お乳の位置、種の同定ポイントとなる部位や顔の特徴などは図解する。

提案に対しては、さまざまな意見が出されました。「コウモリの同定は非常に難しい種もあるため、バンダーの方たちに同定までお願いするのは無理ではないか。」
「標本にしてもらうのは、捕獲許可がないので無理。アクシデントで死んでしまったものについては、回収したい。」
「バンダーの方達にとってコウモリは調査目的ではないので、鳥の調査だけで手一杯なのではないか」・・・・などなど。


コウモリの同定はなかなか難しい

そこで、バンダーによるコウモリの捕獲例は実際、どのくらいあるのか、また、作業中にそのような時間的余裕はあるのか、などの現状をもう少し調べた方がよいのではないか、ということになり、赤沢泰氏が中心になって情報を収集してみることになりました。

5　「家に入ってきたアブラコウモリ」苦情に対する対処方法としてパンフレットを作成する

提案：橋本肇氏
作成スタッフ：橋本肇、安井さち子両氏

最近、アブラコウモリに関する苦情がコウモリの会を始め、博物館や行政諸機関へ寄せられることが多くなってきました。

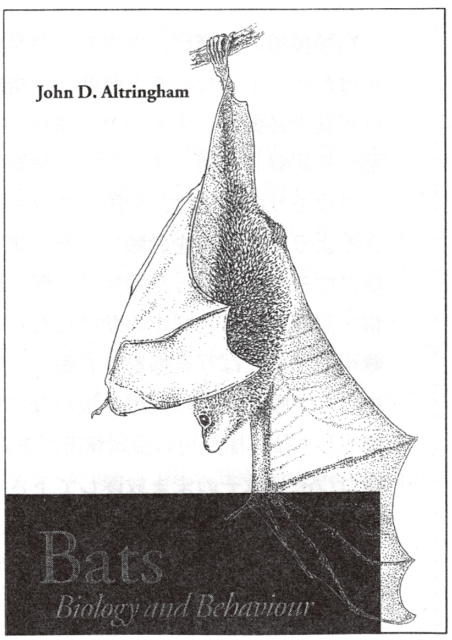
コウモリの会の事務局に最も多かったのは、子どもを拾ったのだが、どんな食べ物を与えたらいいか、という問い合わせでした。成長具合とだいたいの日齢を聞いて、それに応じた返事をしていたのですが、話しだけでは様子がよくわからないこともありました。また、家に棲みついてしまったので追い出したい、という苦情もありました。

アブラコウモリに対して正しい対応をしてもらうために、アブラコウモリとのつきあい方、生態などの基礎知識などや、どうしても追いださなくてはならない時の対処の仕方などを解説したパンフレットを作り、希望者には配布する必要があるのでは。という提案が出されました。作成は提案者の橋本氏と、アブラコウモリに詳しい安井氏にお願いすることになりました。

6　「Bats Biology and Bihaviour」翻訳者募集について

提案：三笠暁子氏

八坂書房より、「Bats Biology and Bihaviour」(Jhon D.Altringham, Oxford University press ,1996)を、コウモリの会のメンバーで翻訳して出版しませんか、という依頼がありました。コウモリの系統分類や生態、エコーロケーションなど全般についてまとまっている本で、イラストも豊富。各自が負担にならないよう大勢で分担してやってみよう、ということになり、各章の分担が以下のように決まりました（以下、敬省略）。



1 The Evolution and Diversity of Bats	藤原直子
2 Flight	植木康徳・久野公啓
3 Echolocation	羽太謙一
4 Torpor and Hibernation	山本輝正
5 Reproduction and Development	三笠暁子
6 Behavioural Ecology	橋本　肇

7 Community Ecology and the Interactions
Between Bats and other Organisms　安井さち子
8 Conservation　山本輝正

なお、本は順調に行けば今年じゅうに出版される予定です。また、総監修は松村澄子氏（山口大学医療技術短期大学部）にお引き受けいただきました。

コウモリからの狂犬病感染

原田　正史

狂犬病は、種々の温血動物間に流行するウイルス性伝染病であり、病獣による咬傷でヒトにも感染する“人獣共通伝染病”である。幸い、わが国には1957年を最後に発症はないが、一歩海外に出ると発展途上国を中心として多くの国で流行がみられる。海外との人的交流、ペット動物の輸入などの増加で、輸入狂犬病に出会う可能性は無視できない。また、狂犬病が存在しない国と考えられていたイギリスとオーストラリアで、コウモリから狂犬病があいついでみつかった（その他、狂犬病の流行がないと考えられている国：ノルウェー、スウェーデン、日本、韓国、マレーシアなど）。分析法の発展にともない、狂犬病がないと考えられている日本においても、野生動物からウイルスが発見されるかもしれない。

【具体例】

英国の例：1996年５月、ニューヘブンで行動のおかしいホオヒゲコウモリ（Myotis)が地元の動物愛護団体の女性に保護された。その際に一人が咬まれた。安楽死させられたあと、研究所に送られ検査されたところ、このコウモリは狂犬病だった。幸い、咬まれた女性は狂犬病ワクチンの接種を受け、発病することなく終わった。

オーストラリアの例：1996年11月、怪我をして保護されたオオコウモリの面倒をみていた保護団体の飼育員の女性が、コウモリにひっかかれて狂犬病になり死亡した。最近、オーストラリアのクロオオコウモリBlack fruit bat とオーストラリアオオコウモリLittle red fruit bat からあいついで狂犬病ウイルスが分離されている。

米国の例：1995年、ワシントン州で４歳の少女が狂犬病に発症して死亡した。両親は２～３週間前に彼女が眠っている時、彼女の部屋に１匹のコウモリをみつけ、それを殺して庭に埋めたことを思いだし、検査が行われた結果、子供に感染した狂犬病ウイルスと同じタイプのものがみつかった。

【病理】

これまでに狂犬病ウイルスは５タイプが知られている。病原体は通常、病獣の唾液中に含まれる狂犬病ウイルスであり、咬傷により感染する。病獣としては、アジア、アフリカ、中南米など発展途上国の国々では、ほとんどがイヌであり、まれにネコによる場合もある。

ヨーロッパ諸国、北アメリカなどの先進国では、ヒトの狂犬病はまれであるが、動物間には、いぜんとして流行が続いている。家畜であるイヌに対する予防接種がほぼ完全であり、したがって、キツネ、アライグマ、オオカミ、マングース、スカンク、コウモリなどの野生動物が主な媒介動物となっている。

感染経路としては、この他にまれではあるが、コウモリの多く生息する洞窟などでエアゾールの吸入による感染が報告されている。

【診断と治療】

狂犬病では多くの場合、発病は咬傷を受けた部位、傷の程度などにより異なるが、30～90日の間が最も多い。症状としては、頭痛、精神不安などではじまるが、これは狂犬病に特徴的なものではない。このような前駆期に引き続いて、幻覚、興奮、躁動などの狂躁状態を主症状とするものを狂躁型狂犬病という。このタイプが狂犬病全体の80％ぐらいを占めるが、特に呼吸系の過剰防衛反応として、いわゆる恐水状態に陥ることから恐水症の別名がある。狂犬病は、いったん発病したら治療法はない。

【予防】

阻止駆培養不活性化ワクチンが開発された結果、流行地へ出向く人などは、予防ワクチン接種を受けておく必要がある。また、狂犬病の疑いのある動物に咬まれた場合には、ただちにワクチン接種を開始する必要がある。日本のコウモリを取り扱う場合にも、厚手の手袋を使用し、咬まれないように心掛ける必要がある。

参考文献

三舟求真人、万年和明：輸入感染症—国際化時代への警告　狂犬病。医学のあゆみ　174（7・8）673-677,1995

山内一也：人獣共通感染症　第48回　コウモリからの狂犬病感染。霊長類フォーラム　1996.11.19

（はらだ・まさし　大阪市立大学医学部動物実験施設）

B A T　I N F O R M A T I O N

■コウモリの狂犬病がみつかり問題になっています（原田氏の記事を参照）。狂犬病のウイルスは日本のコウモリからはみつかっていません。少なくとも日本のコウモリで人間に襲いかかってくるコウモリは知られていませんが、行動のおかしいコウモリをみつけた場合には慎重に扱うべきでしょう。野生動物と付き合う場合、どんな未知のウイルスや病原体をもっているのかわかりませんから、少なくともかまれたり、ひっかかれたりしないよう気をつける必要があります。これから特に、一般の人を対象とした自然観察会など開く場合は注意が必要ではないでしょうか。

■コウモリにバンディングする方が増えてきました。バンドに刻む記号は、頭文字（アルファベット）＋ナンバーという形のものが多いようですが、他の人と同じ記号を使ってる可能性もあります。また、どこかでバンドをしたコウモリがみつかった場合、どなたが付けたものかがわかるような一覧表があると便利です。そこで、会ではバンドの経験のある方々に、自分が使用されているバンドの頭文字とナンバーについての情報を集めたいと思います。（バンディングの生データは必要ありません。）また、こんな場所でこんな種類に付けた、という記録、またはそれが書ききれないほど大量に付けている方は、「このマークであれば、自分のバンドにまちがいない」、という「バンドの同定ポイント」などを記載して、事務局までお寄せください。

■コウモリの会では、オヒキコウモリと思われる可聴音で鳴くコウモリの声の情報を集めています。「チッチッチ・・・」と比較的大きな声で鳴きながら飛ぶコウモリ（と思われる）の声を聞いたことがある方は、●聞いた場所の地名（なるべく詳しく）●場所の標高●周囲の環境●声を聞いた時の様子●姿が見れた場合は飛んでいた高さと大きさ。を、郵便、FAX、電子メール　　にて事務局までお寄せください。

■現在、環境庁のレッドデータブック改訂版の作業が進められています（1998年公表予定）。検討委員の一人である前田喜四雄氏よりコウモリの会の会員に情報提供のお願いがありました。日本のコウモリ類の生息状況をなるべく正確にレッドデータブックに反映させるためにも、会員の方々に情報の提供をお願いいたします。以下に情報の項目を列記します。1.種名 2.採集地(観察地)3.洞窟名(洞窟棲の場合)4.観察日(複数の場合は最新のものを)5.時期とおおよその個体数：春(　)・夏(　)繁殖ｺﾛﾆｰ・秋(　)・冬(　)冬眠ｺﾛﾆｰ 6.同じ洞窟にいる他種のコウモリ7.報告書の有無（あれば題名と報告書名）8.その他です。なお、寄せられた洞窟名などのデータは内部資料とし一般に公表しません。情報はコウモリの会事務局へ。

■今年の8月9（土）、10（日）日に青森県天間林村中央公民館にて、天間林村主催の蝙蝠小屋20周年記念行事が開催されます。パネリストによるフォーラムや観察会、バンディング体験会などの行事が予定されています。内容などの詳細が決まり次第、またお知らせします。

■原稿募集

編集部ではコウモリに関する情報を随時受け付けておりますので、ぜひお寄せ下さい。原稿をくださった方はささやかながら会費1年分を無料にさせていただきます。

■入会案内

＊申込方法　ハガキに住所、氏名、電話番号をお書きの上、事務局までお送り下さい。

＊年会費1000円。お振り込み先は、郵便振替口座：00270-4-12189口座名：コウモリの会。

コウモリ通信　Vol.5 No.1 1997.1

（通巻第9号）

●シンボルマーク　　村上 康成

●編　集 三笠 暁子・水野 昌彦

発行:コウモリの会

【編集後記 】◆会報の発行が大幅に遅れてしまいました。申し訳ありません。今回は会報がもう１号出せるほど記事が集まったのですが、編集に時間がかかり全部は掲載できませんでした。ということで、できるだけ早めに次号を発行したいと思っています。◆オヒキコウモリの生息地が日本で初めて発見されました。２～３cm の岩の隙間にはさまるように棲んでいました。発見者の方に、次回で報告してもらおうと思っています。

©1997 Bat Study and Conservation Group of Japan